札幌新まちづくり計画市民会議
経済・雇用分科会第１回会議概要録

■日　時　平成１５年１２月８日（月）　１８：００～２１：００

■場　所　ＭＮビル　５階　札幌国際プラザ・コンベンションホール

■出席者　内田和男 会長
髙田悦子 委員　・荒　紀男 委員　・工藤仁美 委員　・田村丈生 委員
平本健太 委員

■次　第

１　開　　会
２　会長あいさつ
３　議　　事
（１）分科会の進め方について
（２）確認事項（委員提出メモの扱い等）
（３）事務局説明（現状と課題等）
（４）意見交換（現状と課題等）
（５）議論のまとめと次回の議題確認
（６）副会長指名
（７）次回の日程調整
４　閉　　会

■議事の概要

まず、分科会の進め方と委員提出メモの扱いについて確認した。今後は、資料１に沿って会議を進めていくとともに，委員のメモは個人の考えとして公表することが承認された。

続いて、事務局から重点戦略課題ごとの現状と課題について説明がなされ、活発な質疑応答と意見交換が行われた。

次に、経済・雇用分科会の副会長の指名が行われ、平本健太委員が指名された。

最後に、次回の第２回会議は１２月２２日（月）午後６時より開催されることとなった。

■意見交換の概要

□委員提出メモの扱いについて

・　この会議は公表ということになっているので、委員提出メモについても公表する。ただし、会議資料の一部として公表してしまうと、会議としてオーソライズしたことになってしまうので、あくまでもそれはそれぞれの委員の先生のお考えである旨がわかるような形で公表させていただく。（内田会長）

□配布資料に関する質疑応答（Ｑ／Ａ）と意見（・）

◆重点戦略課題「中小企業や創業に挑戦する市民へのきめ細やかな支援」について

Ｑ　実態と札幌市のしてきたことの間に格差があるという実感がある。過去10年ぐらいの間に札幌市がしてきた成果のデータを出してはいただけないだろうか。（田村委員）

Ａ　成果ということについては、例えば雇用が増えたということを考えると、市が支援したから雇用が増えたのか、ご本人たちの努力があったから増えたのか。その測りかたはなかなか難しい。（事務局）

・　中小企業対策の場合、成果というと、プラスの成果ばかりではなく、マイナスを埋めるということが成果になるものもあるので、そのあたりの判断は非常に難しい。ただ、我々は成果を出せというよりも、むしろ評価をしなければいけない。結果が出た・出なかったではなくて、それをしたことによってどういう影響が出たのかということを評価しなければいけない。お金の使われ方をどう評価するかという視点を我々自身が見つけていかなければならない。逆に言うと、今まではその評価機能がなかったということが問題だったといえる。（内田会長）

Ｑ　市の施策、事業のパートナーとしてのさっぽろ産業振興財団の役割はとても重要なところだが、財団の仕事について、あいまいな部分をはっきりさせて、前向きに取り組んでいくべきではないか。（髙田委員）

Ａ　これは本当に大事なこと。札幌の産業を振興させるためにこれを市の外におくことの意義をこれからはきちんと検討すべき。財団をなくせばいいというのではなくて、外から人材を入れたりすることで活性化させていくといったことを検討していく必要がある。（内田会長）

Ｑ　こういう財団の機能をＮＰＯなどの民間が受け皿となって果たしていくといったような方針はないのだろうか。（田村委員）

Ａ　産業の振興をこういった財団でやっていくよりも、業界団体のようなところがＮＰＯ等を作ってやっていったほうがもっと機能的にできるのかもしれない。そういったことは我々としても検討していきたい。また、国、道、市の役割分担といったことについても、方向性を持って考えていかなければいけないと思っている。（事務局）

・　札幌の場合、中小企業というよりも零細企業がほとんどといったほうがいいのかもしれない。はっきりと零細企業対策的なものを意識し、零細企業を中小企業に育てていくような手立てが必要かもしれない。（内田会長）

・　起業支援、また、零細企業を中小企業に育てていくということがしっかりできれば、本当の地場産業の育成にもつながると思う。ただ、これからの起業の際には必ずしも雇用関係ではなく、ワーカーズコレクティブやＮＰＯなどの方法も考えられるが、一番大事なのは契約である。トラブルが発生しないように、また、トラブルが起こった時にどう対応するのかというところまで、施策の一環として考えておくべき。（工藤委員）

◆重点戦略課題「安心して働ける環境づくり」について

Q　資料にある「働き方の多様化」の部分だが、タイトルと説明が逆の内容になっている。私自身も説明と同じように決して働き方は多様化していないと考えている。（工藤委員）

A　最近新たな雇用スタイルが出てきていることもあり、多様化ということも視野に含めた形でやっていくという意味で、多様化という言葉をタイトルに使ったが、誤解を与えてしまった。別の言葉に替えたい。（事務局）

・　今の札幌の状態が厳しいと打ち出す方法もあるが、逆に将来は明るいので頑張っていこうという打ち出し方も選択肢としてはある。それは現時点での我々の判断になる。また、従来と同じような雇用スタイルに固執することが課題解決につながるのかという問題もある。（内田会長）

・　雇用のミスマッチが生じているということについて。札幌におけるミスマッチがどういうものか、一般論で述べるだけではなく、もっと具体的な検証をしてみるべき。（内田会長）

◆重点戦略課題「協働による観光振興とコンベンション事業の推進」について

・　集客交流資源の活用ということに関して、藻岩山などの豊かな自然に着目したい。例えば山にもみじを植えることによって、紅葉の時期の風景を今以上に豊かにして、それによって秋も観光客を札幌に呼び込む。そして、その苗木は市の職員らのボランティアで育てていく。長期的に見て、そういう活動を続けていくことは十分全国に発信できると思う。（髙田委員）

・　個人的に思うことだが、最近は卒業記念の植樹を行うところが少なくなったようだ。今は代わりに物を置いていくということで、ある時点からお金だけの問題に効率的に変えてしまった。こういったことを色々なレベルでもう一度見直していくべき。ある意味これは我々の生活スタイルの変化の問題でもある。（内田会長）

・　今年の大通西 6 丁目、7 丁目あたりの紅葉は素晴らしかった。台湾から来ている方々も感動していた。やはり、大通のような大勢人が集まるところはもっともっと工夫していくとすばらしいものができるのではないか。（荒委員）

・　札幌市として、先人としての誇り高いアイヌ文化を表現することは大事なことであり、今までの札幌に欠けていたことでもあると思う。そういったものを表面に出していったときにこそ、北海道らしい、札幌らしいものがひとつできあがると思う。（髙田委員）

・　なぜ、札幌にはイベントが来ないのか。その理由は相手方に聞いてみないと分からない。そういうマイナス面の調査など具体的な検証をしながら、息の長い観光振興施策を考えていくことが大事だと思う。（内田会長）

Q　観光にウェイトを置くのであれば、何を目玉にするのか。例えば山や川という天然資源に加えて、プラスアルファとしてのホスピタリティを売りにすることは考えているのだろうか。（平本委員）

A　札幌市の売りが何なのかということは永遠の命題といえる。ある意味札幌の持つ人情味といったものが際立ったホスピタリティになるのかもしれない。それを売り物にしたいということで、今年から「おもてなしプロジェクト」を始めていて、来年はさらに広げていきたいと考えている。（事務局）

◆重点戦略課題「さっぽろの知恵を活かした新たな産業の創出」について

・　デザインの活用ということに関して、ファッションショーやコンクールなどはどんどんやっていくべき。表彰制度などを設けることもいいかもしれない。また、ファッションばかりではなく、食品についてもコンテストなどをしていくといいと思う。（髙田委員）

Ｑ　行政が特定の私企業や産業を支援するのは難しいが、やはり優先順位をつけることは重要。どういうことを視野に入れて優先順位をつけたらいいのか、市としての展望はお持ちだろうか。（平本委員）

Ａ　税金を使って支援をしていくのだから、そういう業種は、札幌市の産業構造を変えていくような見通し、見込みのあるところということになる。この分野に投資すれば、この産業はきっとこうなるというビジョンは必ず必要である。（事務局）

◆その他現状と課題の認識に関して

Ｑ　過去 3 か年ぐらいに札幌市に対してどういう苦情が寄せられたかを教えていただきたい。それは課題を認識するのに役に立つと思うので。（荒委員）

Ａ　それは市としてグルーピングして処理していると思う。おそらく、経済的な問題よりは、除雪等への苦情が多いとは思うが。（内田会長）

□その他の意見交換

・　ある意味札幌は今どん底にあると思う。我々が住みたいまちとはどんなまちなのかということが本当に問われている時期。今回取り組むのであれば、時間がかかっても、ここでの議論を市が受け止めて、５年後、１０年後には明るく変わっているという認識を皆が持てるものでなければいけない。
今まで市がしてきたことの方向性に大きなまちがいはなかったと思う。今しなければならないのはそのやり方を今までにはなかった発想で工夫していくということ。我々も市も発想を変えなければならない。（内田会長）

・　これからの時代を支える若い世代の視点を持ってほしい。私たちの下の世代が夢を持って生きていける札幌でなければいけない。それはどの分野においても一番に言えることだと思う。（田村委員）